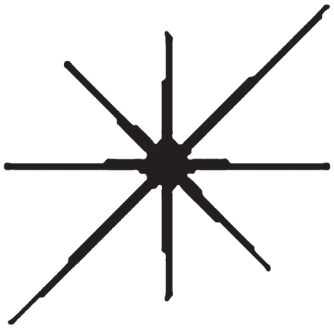
コメット通信 15

［’21 年 10 月号特別付録］



comet book club

éds. de la rose des vents - suiseisha

物語の余熱（7）
――「ブラック・ノート」抄

中村邦生

41 「廃物オン・パレード」（抄録）

（35 冊目，4 － 35 ページ）

ごく最近のようにも，遠い過去の気分の揺れのようにも感じられるのだが，私は「ブラック・ノート」からいったん離れ，改めて読む機会を待つと述べた。同時に，「どのように読むべきか」といった問題は留保するとも書いたのだった。いよいよ時が満ちて再読への充溢した気構えに到るわけでもなく，今だに漫然と日々を過ごしている。

もちろん，「ブラック・ノート」への関心で日々の時間を埋め合わせているわけではないが，いささかの気分の弛みがあってこそ，ゆるやかに意識の前面に膨れ上がってきた思いはある。先に述べた，「ブラック・ノート」は「どこかに廃棄されてしまった文章の亡所」なのかもしれないという問題である。最終番号に近いノートを何冊か見るともなく眺めていると，まさしくゴミや廃棄のテーマに関わりのある文に視線が吸い寄せられた。

長文にわたるので，適宜中略する。数ページごとに見出しタイトルが入っており，やや煩雑に思えるが，そのまま残す。

〈ガムを捨てる〉

さっきの恐ろしいガムの話って何なの？

Y 子は炊飯器のタイマーをセットし終わると，台所から居間の方に顔だけ覗かせながら訊いた。深夜，翌日の仕事の準備が済んでようやく眠気に逆らう必要がない時間となり，A介は歯ブラシをくわえたままテレビの画面をぼんやり見つめた。

彼は夕食のときガムの話をしかけたのだが，ちょうど友人の樋口から，カナリアが死んだという電話を受けて，その経緯を妻に伝えているうちに言いそびれてしまった。

テレビは天気予報を告げている。A介は日本列島を移動する雲の動きを見ながら記憶をたどった。天気予報のバックに聞き覚えのあるピアノ曲が流れていて，夜想曲風の甘やかな旋律が柔らかなリズムで浮かび上がりかけては，また低声部に吸い込まれる。

「捨てようとして，どうしても捨てられない薄気味悪いチューインガムのことを話そうと思ったんだ」

「何か危ない添加物が入っているとか……」

「そうじゃなくて，噛むんだよ」

「そりゃそうでしょう，ガムなんだから」

一瞬，歯磨きを呑みかけたが，A介は嘔吐をこらえて言った。

「捨てるに捨てられない変なガムの話さ」

「なんだ，小説のことなのね，ニュースとかじゃなくて」

と Y 子は急に興味をなくした。

A介は洗面所に行って口をすすいだ。身体は眠りを求めているのに，頭の芯だけが不愉快に冴えてくる。
「本当に経験したことなんだよ」
彼は居間に戻って，ふたたびソファーに身を沈めながらそう呟いた。
「何のこと？」
「だから，今の恐ろしいガムのことだよ」
「その話だったら，もういい，気にしないで」
「子どものとき，ガムに噛まれたことがあるんだ。親父の死ぬ少し前だから，5歳くらいのときかな……」
とA介は強引に話を続けた。
ある初夏の昼下がり，A介はガムを口に入れてしばらくすると，苦痛に顔をしかめて泣きだした。隣の書斎で仕事をしていた父は何事かと駆けつけた。
「ガムをかむのをやめなさい。何を言ってるんだかわからないじゃないか」
父は落ち着いた声でA介をたしなめた。
「ちがうよ……」と彼は呻きながら言う。「ぼく，ガムなんか，かんでないよ」
「何をわけのわからないこと言ってるんだ」
父親はそう繰り返し，少し怪訝そうにA介の不自然な口の動きを見つめた。
「ガムがね，ぼくのこと，かみだしたんだ」
A介はガムを食べはじめると，初めて経験するような違和感のある歯ごたえが気になってすぐに捨てようとした。ところが，吐き出そうとするとガムは生き物のように口の中に吸い付いて，勢いよく上下運動を繰り返すのだ。それにつれてA介の顎は激しく痙攣する。
父親は半信半疑で息子の口の中に指を突っ込んでその奇怪な白い塊を引っ張りだし，机の上にそっと置いた。すると妙なことに，ガムはまだ口内にあるかのような上下に波打つ動きを見せた。そしてしばらくするとガムは机の上からA介の膝の上に落ち，ふたたび元の口の中をめざして，シャツの胸元を這い登りはじめた。
父親は恐怖にかられてガムを窓から投げ捨てた。ところが夜になると，ガムはドアの下の隙間から，柔軟な体を巧みに扁平に変えて部屋へ入り，またA介の口の中に戻った。
叩き潰してみても，ガムは自分で身を柔らかくほぐして，すぐに回復してしまう。父親はガムをハンカチで包んで，近くの善福寺川に流しに行った。ところがガムは川岸に泳ぎ着き，いつの間にか子供部屋に戻って来た。
今度はガムを車で遠く奥多摩の森まで捨てに行き，急いで逃げ帰った。しかし，ガムは青梅街道まで這って行き，都心に向かう長距離トラックのタイヤに張りついて，三日がかりで帰って来てしまった。口からガムを引き剥がしてみると，タイヤの溝の跡がわずかに付いていた。
父親はガムをガスストーブに放りこんだ。ガムは熱さに驚愕しながら暴れ回っていたが，やがて青い炎となって燃え，黒い灰になった。彼らは約五日間この奇怪なガムに悩まされ続けたのであったが，燃やすという意外に簡単な方法ですべて解決したかに思えた。しかしガムは黒い灰の状態から少しずつ収縮を繰り返しているうちに，だんだん生気を帯びて色も白さを回復していき，最初の弾力を取り戻して甦った。
あらゆる方法が尽きたとき，A介の方が実に単純なことを考えついた。ガムをビーカーに入れて蓋をし，強力な接着剤で密封したのだった。

ガムは逃げ道を探してビーカーの中を這い回り続けた。何日間かは自分の陥った苦境を脱しようと, さまざまな脱出の方法を試みていたが, 七日目になってようやくぐったりと動かなくなった。
父は庭に穴を掘って，ビーカーを地中深く埋めた。そして全員で賛美歌をうたってガムを丁重に弔った……。
「恐ろしいガムの話だと思うだろう？　とにかく子どものとき, ガムに噛まれた経験があるんだ」
とA介は話し終わるとおおげさな深い溜息をもらした。Y子も似たような溜息をつきながら，彼の顔をのぞきこんだ。
「5歳のときの経験なんて，そんなに細かく覚えているはずないでしょう？　お弔いのときに賛美歌をうたったの？　何か変じゃない。あなたの家族，そんなに信心深いわけじゃないし」
「やっぱり変だと思うか？」
「いい加減にしてもらえる？」
「これ，本当に覚えているとおりの話だよ。だから，困っているんじゃないか」
「たぶん後から読んだ小説か何かの話といっしょくたになって，記憶が混ぜこぜになっちゃったんじゃないの」
「母親に訊いても記憶にないって言うし，実際に変だなとは思っているんだ。とにかく，こういうふうに覚えているんだから仕方ないよ。だから，少なくともこれとそっくりな出来事があったことは確かさ」
「かわいそうな話ね」
Y子は軽くもう一度溜息をついて，最後にひとこと同情的な感想をもらした。
「かわいそうって，何がだい？」
「もちろんガムよ。必死に生き延びようとして頑張ったのに, 最後は殺されてしまったんだから」
不意をうたれて，A介は言葉を失いそうになった。
「本気でそんなふうに考えたのかい？」
Y子は何も答えず2階に上がっていき，掃除機の唸る音と何かを片付ける物音がしばらく続いた後，ふたたび居間に顔を出した。
「ねえ，カナリアたちのことだけど，どうして2羽ともいっぺんに死んじゃったんだと思う？樋口さん，何か電話で説明してなかった？　今度会ったら，訊いといて」
と言い残すと，また2階へ姿を消した。A介は黙ってうなずきながら，ふたたびテレビに目をやった。どんなニュースにも薄気味悪いほど微笑を絶やさない初老のニュースキャスターが語りかけていた。
「テレビを見ているだけなら，玄関に置いてあるゴミ袋，捨ててきてくれない？」
階段の上からY子の大きな声がして，A介は「いいよ」と自分でもよく理由の判然としない明るい声で返事をした。
ゴミを堂々と捨てている人はめったにいない。生ゴミと燃えないゴミの区分けを守っていても，こそこそと捨てに行く。だからゴミ置場で人に出っくわしたときほど，ばつの悪いことはない。お互いに視線を避けて速足で立ち去るのだ。

〈捨てた本をまた拾う〉
A介は両手にポリエチレンの袋を下げて外に出たとき，約1年前のゴミ捨てをめぐる深夜の出来事を思い出した。

市の清掃事業所が粗大ゴミの回収料の大幅な値上げを実施したことがきっかけだった。A介たちにとって，この行政の変更は不運としか考えられなかった。市内のブロックごとに組織されている自治会の会長をたまたま彼が務めていたからだ。

会長役は1年交替の輪番制なので，20年に一度しか回ってこない代わりに，街燈の管理から地区の行事，葬式の手配まで地区のあらゆる雑事が任されることになる。この多摩地区では自治会のメンバーを組員，会長のことを組長と言っている。たとえ警察関係者でも，1年間は「組長」と呼ばれ続けることになるのだ。

その夜，粗大ゴミはなかったが，大きさ別に整理された単行本の束が雑誌の山に挟まれていくつか置いてあった。なかに真新しい本や少し珍しそうな古書の交ざっているものがあり，A介は意地汚いことは承知で家に持ち帰った。

「けっこう良さそうな本があるのに，捨てるやつがいるんだね。もしかしたら，出版社勤めの飯沢さんが処分したものかな？」

「何やってんの？」とY子は両手に本を抱えて帰ってきたA介を見るなり叫んだ。「それ，あなたの本でしょう，わたしが捨てにいったのよ。もうゴミなんだから拾ってこないで」

「どうしてそんなことしたんだ？」

「ちゃんと訊いたはずよ。ああ，やっぱり生返事だったのね」

来月早々，引っ越しをすることが決まったものの，A介の方はいつまでものんびり構えていて，Y子はやきもきしていた。

改めて捨てた本を調べたが，実際にはほとんどが雑本で，あえて持ち帰るほどのことはなかった。しかし1冊だけ，買った覚えのない本があった。ある日どこからか密かに書棚へ紛れ込んだのではないかと不可解な気持ちを抱いたまま手に取ったとき，木村祐吉なる著者の『井戸めぐり』というタイトルが気になった。表紙は，つるべの滑車に枯れたカラスウリの蔓が絡み，その古井戸の向こうで焦点をぼやかした道祖伸のような写真がデザインされていた。最初のページを開くと，暗い井戸の底で水が薄く光を浮かべ，朽木のような残骸が転がっていた。古井戸や涸れ井戸の写真集で，簡単なキャプションを読むだけで，それぞれ因縁のある井戸をめぐり歩いたものらしいことが判った。

A介は胸がざわつき，先に進むのをやめた。引っ越しを決めた理由の一つが，井戸の問題に関係があったからだ。自分の家は古井戸を埋めて造成した土地の上に建てられた因縁を持つのか，と気になりだしたのは，元地主の上田という老人が，親切心からではなく嫌味でわざわざ昔の地図を持って教えにきた日からである。しかも「お宅の土地を造成するとき，まだ生きている井戸を埋めちまったんだ」という言い方をした。

A介はまだテレビをぼんやりと見つめていた。

「何の番組を待ってるの？」

2階でパジャマ姿に着替えたY子が様子を見にきた。

「天気予報を見ようと思ってるんだよ」

とA介は言いながら，特に意味もなくふたたびチャンネルを変えた。

「天気予報なら，さっき見ていたじゃない。なんで？」

間違いなくその通りなのだが，改まって「なんで」と訊ねられてA介は困った。天気予報を見たことは覚えていても，その内容は記憶にない。しかも明日の天気がどうなるのか，特別な関

心があるわけでもない。かといって漠然と知りたいと思っていることも確かなのだ。つまり天気とはほとんどの場合そうしたものに違いない。

〈花火の捨て方〉
「明日はどこにも出かけない日でしょう？　わざわざ天気なんか気にすることないのに」
　A介は意識が先回りし過ぎてしまい，何か応答に用心しなければならない問題が生じたように錯覚し，結局のところ何も考えないのと同じ結果になって，Y子が一番干渉されたくない事柄を思わず口にしてしまった。多摩川の河原で華やかに花火大会をしたいと5年も願っていながら，実現できない大量の現物の処分方法の話題である。
「引っ越しを機会に，花火を少し処分したらどうかな」
「どういうこと？　明日の天気とどんな関係があるの？」
「いや，何も関係ない。だから，もうその問題はどうでもいいんだ」
　A介はしまったと思いながら，他の話題に変えるつもりでY子の様子を窺った。
「まだ何も説明してないうちに，もうどうでもいいってことないでしょう？」
「だから，もういいんだ」
　2年前の9月末のある日，二人はライオンズのリーグ優勝がかかった最後のナイト・ゲームを西武球場へ見にいった。応援のためというわけではない。たまたまA介が近所の酒屋の店主から切符をもらってきたためだ。だから後に九州の球団にトレードされた3番バッターが，8回の裏に試合を決めるスリーラン・ホームランをレフトの芝生席に打っても，さして熱狂はしなかった。しかし試合終了後の監督の胴上とともに，ライト・ポールの後方の夜空に巨大な光の噴水のように次々と鮮やかな彩りの花火が打ち上げられたとき，二人は立ち上がって大きな拍手をしたのだった。
　球場に来る1時間程前に，たまたま彼らは花火の打ち上げの準備をする廃墟のような現場を見てきたばかりだったので，あたかも誰も知らぬ賑やかな夢の秘密を楽しむような気持ちがあったのである。
　試合開始のかなり前に着いたのだが，すでに駐車場は満車になっていて，A介たちは湖畔近くの木立の間に車を停めた。そして球場に向かってしばらく歩くと，ロープの張られた空き地が広がり，なぜか中央に解体の途中で放置された3階建ての小さなビルがあった。すでに屋根にあたる部分はなく，2階から3階にかけて抉り取られるように空洞ができていたが，場所から判断して，従業員用マンションの廃墟の一部であることはすぐわかった。空洞の奥に，剥出しになった風呂場と台所の流し近くの白いタイル状の壁面が鈍く光っていて，彼らは何か秘部を覗くような気分になった。
「火事にでもなったのかな？　ほら，あそこ見て」
　とY子は3階の角の壁に黒く残る大きな焦げ跡を指して言った。A介もほとんど同時にそのことに気付いていた。
「何だろうね。あんな上で焚火でもしたのかな」
「変ね，あそこは洗面所でしょう。火なんか使う場所じゃないのに」
　まだ生活臭の残る廃棄された小さな空間の内部が外に曝され，夕映えの始まった空を背にして部屋が宙に取り残されているような光景を見ると，A介は改めてそうした高い所に存在する居住の場というものの持つ奇妙さを思った。

彼らが立ち去りかけたとき，警備会社の車に先導された小型トラックが空き地に入ってきた。そして4人の男たちが細身のドラム缶に似た鉄製の筒を手早く下ろすと，全員で抱えるようにして階段を上がり，3階の洗面所の狭いコーナーを利用して据え付けた。

A介たちがこれは打ち上げ花火の準備だと知るのにはさほど時間を要しなかった。現金輸送に使うようなアルミのケースが次々と並べられたが，どれにも火気厳禁と赤い字で大書してあったからだ。それだけに積み上げられたケースの隙間から白煙が流れ出ているのを見たとき，二人は思わず顔を見合わせたが，すぐに輸送中の安全のためのドライアイスの煙だとわかった。

このことがなければ, Y子は翌日の昼に友人たちと銀座で食事をした帰り, たまたま通りかかった数寄屋橋フォト・ギャラリーの花火の写真展をのぞいてみる気にはならなかったかもしれない。しかも会期の最終日で，関係者が互いに挨拶をし合う落ち着かない雰囲気の中をあえて踏み込む感じだった。

「ロイヤル・スクランブルとかいう花火を望遠レンズで接写したんですって」

とY子は夕食が終わるとすぐにカタログを開き，一番気に入ったという色鮮やかな写真を見せた。

「見覚えがある写真だね。花火って絞りとシャータースピードを少し変えるだけで，いろんな写真が撮れるし，これなんか，ほら面白い模様がたくさんできてるね」

花火の写真は闇夜を背景に赤と黄色と白の細かい筋が錯綜した色の世界を作りながらも，それぞれ同じ系統の色合の円い線が均一に重なり合った輪の模様をなしていた。

Y子が花火に強い関心を持つようになったきっかけに関しては，その週の終わりにも妙な巡り合わせがあった。大手のスーパーがライオンズの優勝に便乗してバーゲンセールを行なったが，その「季節もの，捨て値市」の会場で〈花火サラダ〉と出会ったことだった。

Y子は帰ってくるなり，着替えもしないうちにいきなり収穫の品をテーブルに広げた。

「最後の日だから，何もないと思ったけど，いろんな花火を袋詰めで売っているコーナーがあった。花火のコンビネーション・サラダだって。それが，安いの，これだけ入っていて一袋500円だもの」

「きれいだね」

と思わずA介がまったく不本意なことを口走ってしまったのは，目の前に積み上げられた彩り豊かな花火の山に圧倒されたからで，「何も買わないのが，一番の安上がりだ」という皮肉を言う余裕はまったくなかった。

「線香花火にも，こんないろいろな種類があるなんて知らなかった。花火の名前って，けっこうすごい。この袋に入っている打ち上げ花火だけでも，魔界転生，スーパー・バスター，竜虎の聖剣，シャイニング・ウォリアーズ。ねえ，これ見て，ネズミ花火だけど，猫城戦士ってどういうこと？」

「さあ，どういうことだろね」

A介はもう花火の話を打ち切るつもりで言った。そしてしばらくたって, ライオンズのナイト・ゲーム最終試合から始まり，銀座のギャラリーの展覧会最終日，夏物バーゲン最終処分と，花火との遭遇はいずれも最後の日に関係があったことに思い及び，あたかも花火が何かの終わりと深い因縁を持ち，いつも終幕を華やかに演出し活気づける舞台道具のようにも感じられた。

段ボール箱に入れた花火が6箱を越えた頃，このままコレクションが増え続けたあげく，Y子の気持ちが急変して，山積みした「火薬」をすべてゴミとして処分しなければならない事態も予想できるのではないかと思いはじめ，A介はしだいに心配になった。そして念のため，万一どう

しても捨てなければならない場合にはどうするのかと訊いた。
「そりゃ，燃えるゴミとして捨てるわけには，いかないでしょうよ」
　Y 子は思案気にそう答えた。
「で，どうするんだい？」
「庭に深い穴を掘って埋めるとか。それか，この家の下にあったとかいう古井戸を掘り返して利用するとか。意外にその方が簡単かもね」と Y 子の口調は少し苛立つ感じに変わった。「でも，一番単純で簡単な方法がある。どこかの河原に行って，二人で花火大会をすること」
　A介はそれには何も返事をしないで，そもそもどんなコレクションだって当事者以外の関心のない者にとってはゴミ集めも同然に思えるのだ，と今さら言っても仕方のない一般論を呟いた。
　少し間があってから，Y 子は「ありがと」と新たな考えの閃きに心を弾ませて言った。A介はどういうことかと不可解な思いのまま顔をあげ，次の言葉を待った。
「そう，わかった，確かにゴミね。花火って，最初からゴミとして燃え尽きることを目的にしているでしょう，しかもゴミになる寸前が最高に美しいじゃない？　だから，何て言うか，花火は聖なる消費物なの」
「前からそんなふうに考えていたの？」
「まさか。どんなことだって質問されなくちゃ気がつかないし，考えもしない。これ，あなたがいつも自分で言っていることじゃなかった？　とにかく，花火ほどゴミになる瞬間が美しい物はない。どれも美しいゴミとして消え去ろうする健気で崇高な物たちなんだもの」
　自分はそんな立派なことを訊いた覚えはないとA介は言おうとしたが, それより先にY子は「ありがと」とまた礼を述べた。すると今度はA介が 2 階に上って行き，Y 子はそのままソファーに寝そべってテレビを見はじめた。

〈温風タイマー付きの便器とガス炊飯器〉
　市の清掃事業所が粗大ゴミの回収料金の大幅な値上げを実施した翌朝，最初に投棄された物だった。
「炊飯器はともかく，便器なんて，新しいのと取り替えたら，たいてい業者が古い方を引き取っていくのに。……ねえ，聞いてる？」
　と Y 子が言った。A介は新聞の疾病・傷害入院保険の大きな広告に目を通していた。
「じゃ，業者が捨てていったんだろう」
「それはないと思う。あんなもの一つ捨てたところで，たいして得にならないもの。わたし，もう出かける時間だから，後はよろしく」
「便器に何かタイトルが付いてなかったかい？　たとえば『泉』とかさ」
　A介はマルセル・デュシャンの作品を思い出して，冗談を言ったつもりだった。まだこの頃は余裕があったのだ。
「製品名まで確かめてこなかった。気になるなら，自分で見てくれば」
　Y 子は玄関で慌ただしく靴箱を開けながら叫んだ。A介はゴミ置場へ行き，実際には何の役に立つか判らなかったが，とりあえず製品名を書き記した。
　ウォームレットH型〈スプリング・ストリーム〉。
　不燃ゴミの回収日になれば，清掃事業所の方で適当に処分するだろう，とA介は高をくくっていた。

ところが3日目の朝，Y子は堅い表情でゴミ置場から戻ってきた。便器に“組長さん，早く処分してください。利用者一同より”という貼紙がしてあるというのだ。

「うちは近所からかなり嫌われているみたいだな。そうじゃなかったら，利用者一同なんていう書き方はしないよ」

とA介は放り投げるような口調で言った。

便器と炊飯器はその日のうちに処分した。費用は3600円であったが，市の清掃事業所は立派な印章の入った異様に大げさな領収書を置いていった。

便器がなくなると，あたかも何者かが事態の成り行きを窺っていたかのように，キッチンワゴンや業務用食用油の空缶など，一夜で四つの粗大ゴミが投棄された。

A介は市の環境衛生課に行き，ゴミ行政の矛盾を納税者である市民に一方的に押しつけるのは納得できないと抗議した。

今のところ他の地域では問題はなく，お宅のゴミ集積所だけの特殊なケースだ，しかし今後大いに予想される事態なので十分に検討を加えることにしましょう，とA介と同じ年かっこうの能弁な職員が出てきて，慇懃に答えた。そして最後にこう付け加えた。

「はっきり言えば，これは地区の自治的な管理能力の問題です。まず利用者全員で話し合いの機会を持ち，一軒一軒の意見を十分に踏まえた上で解決の道を見つけることが大事じゃないでしょうか。その方がより民主的な方法だと思います」

A介はこうした立場の男の口からもれた「民主的」という言葉に，嫌味なものを感じて市役所を出た。粗大ゴミは，「近所」を無視してしばらく放置しておくことにした。しかしY子は民主的方法の手始めとして，地区の新住民のうちで比較的親しい女性たちに，話し合いのための予備的な相談をもちかけた。すると奇妙なことが起こった。同じ日の昼すぎにゴミ収集車とは違う小型トラックがやってきて，きれいに粗大ゴミを片付けていった。

夜になってから，地区の有力者である上田老人に伴われた市会議員が予告もなしにいきなり玄関先に現れた。血色のよい大柄な初老の男で，呆れるほど朗らかな声でこう言った。

「今回の粗大ゴミは私の方で適当に処分させました。何か地区のことで困ったことがあったら，いつでも相談してください。できるだけのことはしますから。また面倒なゴミが捨てられるようなことがあれば，遠慮なくそのつど連絡をください。何か方法を考えますから」

A介は不愉快になった。しかし，Y子は，何とかしてくれるというのであるから，遠慮なくどんどん頼んだ方がいいと割切った。

「もう粗大ゴミを捨てる人はいないんじゃないの。市会議員まで来たということは，そういう意味でしょ」

しかしY子の勘は外れた。

（中略）

この後，「廃物オン・パレード」というタイトルのとおり，廃棄物とその処理の顛末が次々と列挙される。初期ワープロのNEC〈文豪〉2台と同じくシャープ〈書院〉1台，黒焦げ状態の大きな中華鍋，ビニール傘3本，蛍光灯スタンド，レザーディスク用プレイヤー，プラスチックの6段書類ケース，子ども用のビニール製プール，またもや業務用の食用油の空缶2個，CD収納棚，吹きこぼしの痕の広がる卓上コンロ（中に使いかけのガスボンベが入っていた），キャンプ用保冷ボックス……。

子ども用学習机の場合もあり，次のような遣り取りが書かれている。

「わかったわ，犯人が」とY子はゴミ置場から戻ってくるなり叫んだ。「学習机についている蛍光燈のところに，タケイ・ミユキっていう名前が書いてあった」
「タケイ」は近所にはない姓であった。Y子は市役所に行き，就学児童の名前を過去5年間まで遡って調べたようとしたが，窓口であっけなく断られた。
二人とも否定したい気持ちが強かったのだが，一連の粗大ゴミの投棄は近所の誰かの怨恨によると考えられないこともなかった。原因はあるとも言えるし，ないとも言えた。他人の抱く恨みの細々とした原因などわかるはずはないからだ。

厄介な廃物に加え，地域の厄介者がまたもや介入してくる。次のようにエピソードが記されているが，どこなくユーモラスな上田老人の面持ちや風采が描かれていれば，人物像により気息が通ったものになったかもしれない。

単身者用の冷蔵庫，エプソンのプリンター，病院かどこかで使うものなのか，キャスター付きの大きなバケツ。
清掃事業所の粗大ゴミ受付係の男は，度重なるA介の依頼の電話に同情し，プリンターを冷蔵庫の中に入れて一つのゴミとして扱うという手配をしてくれた。
翌日の夜，上田老人が明らかに何か苦情がありそうな硬い表情で現われた。
「きのう，ゴミ置場に便利そうなバケツが捨ててあったと思うが，もう処分しちゃたのかね？」
A介はそのとおりだと答えた。
「ただ捨てちまえばいいってもんじゃない。まだ使えそうなものと，そうでないものを区別ぐらいしたらどうかね，あんたは組長なんだから」
「なんで今年の組長だけそんなことまでしなくちゃならないんですか？」
これ以上やっかいな仕事が増えてはたまらないとA介は警戒した。
「車が付いているバケツなんて，めったにあるもんじゃない。誰が考えたんだか便利なもんだ。惜しいことをしちまった」
と老人はあくまでもバケツに執着しているだけの様子なので，A介は少し安心しかかった。ところがこの人物はいつもそうなのだが，それ自体は正論と言えるものの，本気で実行するとなれば多くの面倒な労力を強いられる提案をした。
「あんたの判断でいいから，これから先は使えるものと使えないものを分けておいてくれないかい。それで，地区のみんなに定期的に集まってもらってリサイタルの集会を開けば資源の節約にもなるし，親睦にもなるじゃないか。物をいつまでも大事に使うリサイタルの生活こそ，これからの時代は考えないと」
老人がリサイクルをリサイタルと言い間違えていることにA介は気づいたが，労わりの気持ちが少し動いて，あえて訂正しなかった。
「わかりました。とにかく，リサイタルは大事です，リサイタルのことは今後の課題ということにしましょう」
A介は取り成すつもりでそう言った。しかし，上田老人は何かの錯誤に思い当たったらしく，とぼけるような表情を作って無言のまま足早に帰っていった。

〈蒲団と枕〉
　蒲団はゴミ・ステーションの鉄柵の中に，きちんとたたんで置いてあった。
　全体に色褪せていたが，上下一組みの蒲団と枕に揃いのピンクの薔薇模様があって，少し視線をそらしたくなるような生々しさがあった。
「独身の若い女の仕業かもしれないぞ。きっとボーイフレンドの車かなんかで,捨てに来たんだ」
　とA介は言った。
「変な想像のしかたね」
「これまでと違った生活感覚のものだから，犯人は複数いるということだな」
　次に捨てられる粗大ゴミはどんな物だろうか。
　ゴミの処理にさんざん悩まされてきたにもかかわらず，おかしなことにA介は次の投棄物への好奇心が動きだしている。
　それどころか，これまで捨てられてきた物の取り合せを振り返り，それらとのバランスから考えて次はどんな物を捨てるのがふさわしいか，とあたかも自分がゴミ捨ての当事者であるかのように，奇妙なこだわりを持ちはじめていた。
　しかしすぐにそうした好奇心を嘲笑するように，ことのほか面倒なゴミが捨てられる事態が起こった。

〈スチール製の物置〉
　あまりに法外な投棄物なので，これを「ゴミ」と納得するのに数日かかった。
「どうしよう。うちの庭に置くかい？」
「まさか」とY子は溜息まじりに言った。「こんな狭い庭に，二つも物置なんかいらない。それにあの物置，魚が腐ったような，すごく生臭い臭いがするんだけど，気がついた？」
　A介の脳裏に閃きの光が走った。
「あの物置，市役所通りの魚丸でもらってくれないかね。どうだいこの考え？　魚用の生ゴミ置場に使うには上等だろう」
「どうかな。明日，魚丸さんに聞いてはみるけど」
　話はうまく進み，物置はすぐに小型トラックで運ばれていった。その日の夕方，Y子が魚丸に寄ると，お礼に甘鯛の西京漬けを5切れよこした。
（中略）

この後，個人の家から出てきた段ボール箱に詰まったノート類に加え，家庭ではありえない大量の紙類のゴミの出現が短く書かれている。近くに製本屋はない。3キロほど離れた場所に，書籍・雑誌類を溶解処分する工場はあるらしいが，商品となる古紙を大量投棄するはずはなく，真相は不明。粗大ゴミや不燃物と異なり，うずたかく積まれた資源廃棄物の山の盛観をA介は楽しんでいる様子がある。
ここに続く話は，思いもかけない廃棄物との遭遇によって，大きく転調する。

〈オルゴール，チーちゃん，サーちゃん〉
　犯人を現行犯で捕まえるしかない。
　そうした思いが募りはじめて何日か経ったある晩，教員仲間と酒を付き合って，A介は帰りが

深夜になった。
　大通りでタクシーを降り，ところどころ小さな畑の残る暗い住宅街の道に入ってしばらくすると，前方の暗闇の奥でライトを消した不審な乗用車が児童公園の前を徐行していき，ゴミ置場を過ぎたあたりで停車した。すぐに勢いづいていいはずであったが，いざとなると気弱なわけのわからない不安の気持ちが先にきた。しかし幸いにもまだ酔いの勢いが少し残っていた。
　A介は公園を斜めに横切り，身を屈めながら車の背後に回った。そして道路に沿った，木立の陰に隠れ，車の動きを探った。川崎ナンバーで，ボルボのワゴン車である。乗っているのは男女のようだった。
　車は停まったまま，なかなかドアが開かない。息を殺して外の気配を窺っている車内の緊張が，車全体から伝わってくる感じだった。A介は飛び出すチャンスを待ち構えていたが，まったく身動きがとれず膠着状態が続く。
　足先から徐々に寒さが上がってくる。背筋のあたりに感じていた小刻みな震えが，やがて全身に広がりだした。
　窓ガラスに影が動き，後部座席に身を延ばすような格好の男女の動作があった。そしてすぐ二人の姿は消えてしまった。
　瞬間，A介は自分の屈辱的な立場に気づいた。
　事態の誤解にいたたまれずに身を起こすと，木の枝が音をたてて揺れた。車の中から男の罵声が飛んだ。車は怒りのエンジン音を上げながら，闇の中を走り去った。
　不快な気分を引きずって，暗い道を虚ろな足取りで戻りかけたが，いつもの習慣からゴミ・ステーションに目がいった。ポリエチレンの袋がいくつか重なり合い，その一つがネットからにはみ出すように転がっていた。
　A介は袋を奥に置き直した。そのとたん袋の中から音楽が鳴りだした。オルゴールが入っているらしい。間延びした壊れかかった音だが，明快な聞き覚えのあるメロディーで，モーツァルトのモテット「踊れ，喜べ，幸いなる魂よ」のアレルヤの部分であることを思い出した。だが音は間延びがひどくなっていき，やがて息絶えるように消えた。
　A介はステーションの扉を開け，ゴミ袋をすべて積み直した。そして最後の袋を片手で持ち上げたとき，意外な重さの手応えと奇妙な動きの気配があるのを感じた。
　袋から鳥かごが現れ，底の方で2羽の小鳥が逆さまになった餌箱に挟まれていた。懐かしい命の温みに触れたような思いがして，A介は鳥かごを抱きかかえた。
　家に帰ってようやく小鳥たちがゴミとして捨てられたものだという衝撃がやってきた。羽根に艶の欠けたカナリアたちで，突然の明るみに晒され，かごの隅で怯えたようにかたまっていた。そして鳥かごの屋根の部分に，〈チーちゃん，サーちゃん，バイバイ〉と明らかに子どもの字で書かれた紙が，ビニール・テープで貼ってあった。
　Y子は部屋の温度を上げ，手早く水を与えた。それから冷蔵庫にあったキャベツと小松菜を千切って餌箱に置いてみたが，カナリアは動かなかった。
「がんばってね」
　とY子は小声で呼びかけるように言った。
　たぶん事態は単純なことに過ぎないのだろう，とA介は思った。どんな物でも持ち主が不要と感じたとたんに「ゴミ」になる。カナリアだって例外ではない。どんなご馳走にしろ，もういらないと思った瞬間に生ゴミになる。食べる物と捨てる物との違いは，ただそれだけしかないのか

もしれない。そしてゴミの「処理」とは，ともかくも自分たちの家の外へ出すことなのだ。しかも家からなるべく遠くへ運ばれれば運ばれるだけ処理されたことになる。捨てるとはどこかに物が移動するだけのことなのだ。

カナリアは一週間過ぎても鳴声をあげなかった。ペットの動物は飼い主の心の動きに敏感で，自分たちが捨てられると思った瞬間深く傷ついて，その打撃からまだ立ち直れないでいるのかもしれない。そうした点で言えば，彼らの家もまたカナリアたちにとって安住の場所ではなかった。

「このカナリア，どうするんだい。このままずっとうちに置いておくつもりかい？」

「せめて鳴くようになるまでは飼ってあげないと。そうすれば，もらってくれるお宅もあるかもしれないし」

「迷惑に思っている気持ち，カナリアにはわかるんだ。またいつ捨てられるかって，ずっと怯えているんだ」

「そりゃそう。実際に迷惑なんだから，しょうがないでしょう。……ねえ，樋口さんはどう？あれこれペットをたくさん飼っているみたいだし，あの人ならもらってくれるんじゃないの？今度いつ会う？　会ったら頼んでみてよ」

A介は曖昧な返事をしたものの，だんだん友人の樋口に頼んでみようかという気になっていた。

やがて彼らが地区の世話役から解放され，桜の季節も過ぎ，地方選挙で例の市会議員が最下位ながら当選し，若葉の輝く頃になっても，樋口の家に移ったカナリアたちの声は失われたままだった。

〈家を処分する〉

転居の当日，小型トラック一台分が廃棄物だった。家の中にたっぷりと贅肉を蓄えていたことになる。引っ越し業者が処分を代行することになったが，ゴミ・ステーションに粗大ゴミとして廃棄されていたものと同じような物品のオン・パレードだった。一点ずつ処理費用の見積もりを確認すると，中古品として買い手がつきそうな価格だった。

「まだリサイタルできるものだったかな」

A介はすぐに言い間違いに気づいたが，あえて訂正せずに呟いた。

「そうね，ターちゃん，サーちゃんたちの鳴き声，聞きたかった」

名前は「ターちゃん」ではなくて，「チーちゃん」だとも思ったが，A介自身も混乱しかかっていた。ちぐはぐな会話のすれ違いは，いつだって回収されないまま流れて行く。それらはどこか集積する場所があるのかどうか，誰にも判らない。

〈寸感〉

もはや私自身の関心は移っている。従来ならば，文章内容と作者の笠間保とを結びつけ，その人物像や生活背景に思い巡らした。それもないわけではないが，「ブラック・ノート」は彼方此方から流れ寄せてきた「文章の繋留の地」であり，投棄された文章群の「亡所」であるならば，書き手の問題に意識を集中させることに執着がなくなった。もしあるとすれば，掌編や断章を収集した，いわば編者としての笠間保だが，それとて集積地「ブラック・ノート」の仮の標札に過ぎないかもしれない。

しかし，本当にそれでいいのだろうか。じわりと身に張りつく不安感と気迷いは，もっと単純な手前のところにある。「ブラック・ノート」には，かつてどこかに書いた私の文章も，流れ着いたのではないかという疑念である。いったん漂着してから，またどこかを彷徨っているかもしれない。不安

な気分ばかりでなく，漂流物としての再見のチャンスに好奇心が動かないこともない。気にはなりつつも，この懸案を追いかけるのは，少し先送りしたい。その前に，この「廃物オン・パレード」というタイトルを持つ文章から，今ふいに心閃くものがあったからだ。

冒頭に置かれた，何度捨てに行っても少年の口に戻ってきてしまうガムのエピソードは，パリを舞台にしたジョン・スタインベックの短編小説に，よく似た話があったとように思う。「M 街の事件」と題する作であったような気がするが，記憶は曖昧だ。もしそうであるならば，「廃物オン・パレード」自体に投棄物のモチーフがリサイクルされていることにもなろうか。念のため貸出ノートを確認したのだが，記録はなかった。

錯覚なのか，思い過ごしなのか，いささか眩惑を覚える事実もある。二つ目の中略の後，紙類の廃棄物を列挙するなかにあった，「個人の家から出てきた段ボール箱のノート類」に関わるミステリーである。

最初に読んだとき，明らかに「黒表紙ノートの詰まった段ボール箱」とあった。もちろん，「ブラック・ノート」を連想した。「ブラック・ノート」が，その一挿話に自身の存在を潜ませていることに，アイロニカルな企みを感じたのだった。ところが，書き記していく段階になったとき，どこにも見当たらない。あれこれ確かめてみたのだが，黒表紙ノートの入った段ボール箱など何一つ記載はない。

はたして，どこに消えたのか。私はふいに思い立って，書庫に入り，奥の棚を確認した。「ブラック・ノート」の詰まった段ボール箱は，ひっそりと息をひそめている。ふんわりと脳裏に夢想が行き交い，「廃物オン・パレード」にあったはずの黒表紙ノートの箱は，文中から抜け出して，ここに漂着しているのだという思いが明滅した。40 の「プロムナード・コンサート」に登場したミリアムのように，小説の外に脱出して，パリの街からロンドンのコンサート会場に紛れこんだように……。笠間保はそのエイジェントに過ぎないのかもしれない。

42 「ディスプレイをする隣人」

（24 冊目，19 － 27 ページ）

「廃物オン・パレード」に引き続き，吸い寄せられるように読みはじめた文だ。この「吸い寄せられる」という気分のメカニズムの秘密に関しては，一瞬，思い当たる言句が呼び起こされたものの消え去ってしまったので，新たに記憶が甦るチャンスを待ちたい。少なくとも廃物に関係した相似的なモチーフのつながりがあることは確かだ。

〈あらまし〉

東京の西郊のマンション 4 階。会沢夫妻は隣人 X さんの奇癖に悩まされている。部屋の近くの消化器置場にフラワースタンドを置き，日用雑貨を飾るのだ。

六法全書，分解したラシャ鋏，花瓶に見立てたエビオス 3000 錠の空瓶，『ダメ上司のトリセツ』，『ワニの上手な捕まえ方』，『穏当な敵の作り方』といった how-to ものを中心とする啓発本，目覚まし時計，コンサート案内のチラシをためた段ボール箱，ラグビー試合に持ち込まれるような巨大薬缶，高倉健主演の映画ポスターが広げられていることもあった。展示物は廃品として，管理人が撤去した。

X さんは 50 歳代の主婦。会社員の夫は，数年前から姿を見せない。息子も家出をして戻らない。外国の大学に通っているとは，X さんが管理人に話した情報らしいが，真偽は不明。娘は体育大

学に進んで新体操の選手になったらしいが，中退して音楽活動にめざめ，ピアノのレッスンを受けはじめた。防音壁ではないので周りの住人たちは騒音に悩まされる。会沢夫妻は，夫がフリーの編集者，妻が校正者なので，二人とも在宅での仕事に支障をきたした。隣人たちと管理人が問題を協議し，静粛を保つように申し入れるが事態は変わらない。

騒音がひどくなりはじめると，やむをえず会沢さんは壁を擂粉木で叩いたり，ドアをわざと勢いよく締めて示威行動をした。するとある日，フラワースタンドに金槌が置かれ，「これでどうぞ」とメモ書きした付箋が貼ってあった。ところが，しばらくしてピアノの音は止まり，代わりに赤子の鳴き声が聞こえはじめた。それもいつしか消え，ある日，娘は母だけを残して出奔した。

その出来事の後，フラワースタンドには，白黒のタオルと果物の供物が置かれるようになった。気味の悪さに，ふたたび4階の住人一同が管理人に申し入れ，ディスプレイは強制的に排除されることになった。

撤去されたのは，陳列物だけではなかった。真冬のある日，スーツ姿の中年男2人が屈強な若者たち3人を連れて現われ，部屋の家具はブルーシートをかけ，道具類は段ボール箱に詰め，1階のエントランスの外に運び出した。長期にわたるローンの滞納があったらしい。

その日，会沢宅のポストには，大原美術館所蔵のモディリアーニ作「ジャンヌ・エピュテルヌの肖像」の絵葉書が投函され，「長い間のご迷惑とご不快の数々，お詫びします」と達筆な字で挨拶文が記してあった。首を傾げた物憂げな女性像は，X夫人の面影に重なった。

夕暮れ近く，雪が降りだした。エントランスの外に積み上げられた家財道具の隙間でX夫人は身を縮め，道具の一つになったかのように動かなかった。会沢さん夫妻は，何一つ言葉を発しない夫人を労わって玄関ロビーに招き入れ，家具と段ボール箱も中に運んだ。4階の住人たちが最初に気づくと，マンションの住人たちの応援が次々と増え，ロビーに小さな居室のような一角が出来上がった。失語状態の夫人は，管理人の持ってきたカイロで暖を取り，身を横たえるやいなや鼾をかきはじめた。深夜に到り，救急車とパトカーが到着し，朝になるとトラックが現われ，ロビーの家財道具は廃棄物として処理された。

〈寸感〉

実話として記述されている気配を持つ文なのだが，ドアの外の展示物の話は，正体不明の人物によって門の前に次々と供物が置かれるという，吉田知子の「お供え」を思わせないこともない。雪の日にX夫人が家具ともども表に追い出される場面は，バーナード・マラマッドの短編「弔い人」のラストシーンが思い及ぶ。ここでも貸出ノートを確認してみたが，記録はない。それでも，リサイクルとまでは言わないが，二つの作品のモチーフが流れ込み，息づいている可能性があるような気がする。

この「ディスプレイをする隣人」でも，錯視めいたことがあった。マンションの共用スペースに，廃棄されることを承知でXさんが飾りつける物品の中に，黒表紙のノートがあったような気がしたのだ。ところが，記述を見つけたと思って，目を凝らすと消えている。滑稽な振る舞いと自覚しているのだが，今度の場合も書架に「ブラック・ノート」の所在を確かめに行った。

43 「ほら，ほら，天使がとおるよ」

（33冊目，2，3ページ）

いつになく強い午睡の誘いがあった。眠気が背筋を上ってきて，脳髄に到ったときは寝落ちしていた。

夢の中で，私は夢が始まるぞと思った。夢のさらに奥にあるスクリーンを見つめる感覚だ。

イグアナに耳はあるの？

夢うつつに幼な子の声が聞こえる。

さて，どうだったかな，と私は考えながら，夢のなかで目をひらけば，幼な子は顎に大きな飾り袋を垂れ下げたイグアナで，太古の大トカゲにそっくりの面つきに，私は愛しさのあまり涙がこぼれた。

どれどれ耳はどこかな？　たぶんこれがそうらしいね。

目の後ろに鱗で隠れた耳孔のようなもの。

でも，きみには薄茶と草緑とピンク色まで交ざった縞模様の美しい胴体に，みごとな尻尾があるのだから，耳のことなど気にしなくていいさ。

（もちろん夢のなかで）私は言い聞かせた。

気にするなって？　ちがう，ちがう，とイグアナが答える。

そろそろ，夢からさめなくちゃ，と私は（やはり夢のなかで）イグアナを無視して思う。

耳の洞の主人に会いたいだけさ，イグアナの声は小さくなる。

ミミのホラのアルジって何だい？

耳の奥にずっと捨てられたままの思い出を，そう言うのさ。

捨てられた思い出なんか，放っておいてもたくさんあるよ。

ちがう，ちがう，そういうのは，捨てられたことを知っている思い出さ，とふたたびイグアナは言う。耳の洞の主は，捨てられたことも知らない思い出さ。

口や目を開いているのか閉じているのか，もはや声も物音も聞こえない。イグアナの捨て去られた太古の記憶なら私も知りたかったのだが。

沈黙の間を，耳のいとま，とか，耳の間，とか言うのではなかった。鳴り響く沈黙。ヨーロッパのかつての賢人なら，天使が通り過ぎたと言うだろう。イグアナの耳の洞の主人とは天使のことだったのか。

そうだよ，ほら，ほら，天使がとおるよ。

私はいつしか遠くに運ばれてきてしまった，そんな感覚が余熱のように残る。

〈寸感〉

夢の中で，どこに流れ着いたのか。理由は定かでないが，いきなり感情の崩落が起こり，私は泣いたらしい。たとえ夢の中でも，その滑稽さを冷静に振り返ったとき，目が覚めた。疑念がわきだし，ふと促されるものがあって，「ブラック・ノート」を開いた。夢とほぼ同一の話にピンポイントで行き着いたのだ。どういうことか？　もし待ち伏せに遭ったとすれば，夢の方なのか，それとも「ブラック・ノート」の方なのか？

［続く］

執筆者について――

中村邦生（なかむらくにお）　1946年生まれ。小説家。小社刊行の主な小説に，『チェーホフの夜』（2009年），『転落譚』（2011年），主な批評に，『未完の小島信夫』（共著，2009年），『『罪と罰』をどう読むか』（共著，2016年）などがある。